

6. 枝肉成績から見た繁殖農場の子牛の品質向上へのアプローチ

大分家畜保健衛生所

○足立高士・佐伯美穂・松岡恭二

【はじめに】

本県では今年『おおいた豊後牛』を統一ブランドとして立ち上げ、肉用牛の生産と流通の強化を図っている。このような動きの中、肥育素牛や繁殖素牛となる子牛の品質向上は喫緊の課題と考える。今般、肉用牛繁殖農場の子牛育成技術を数値化した育成技術評価値が示され、その技術力に差があることが示唆されたことから、子牛の品質向上に資するため農場の飼養管理の内容を調査・比較をした結果、若干の知見が得られたので報告する。

【比較・検討方法】

繁殖農場の技術力を示す育成技術評価値は畜産研究部から提供されたものを用いた。提供された内容は 2011・2012 年に出荷された枝肉成績 7,163 件を用いて解析されたもので、繁殖農場は全ての枝肉形質に有意 ($p < 0.05$) であった。これをもとに繁殖農場ごとに得られた各枝肉形質の blue 値を技術評価値として着目し、比較検討する農場の抽出に用いた。

比較検討項目は肉質は脂肪交雑、肉量は枝肉重量の 2 点とし、対象農場は前述の抽出方法で管内の母牛 5 頭以上飼養する農場から上位 10% 及び下位 10% を対象とし、飼養状況の調査・比較を行った。

調査内容は子牛管理・母牛管理・飼養環境・疾病状況の大きく 4 区分について行った。子牛管理は哺乳・離乳時期・去勢時期等、母牛管理は栄養状態を 5 段階に設定したボディコンディションスコア (BCS) の分布・年齢と産歴構成等、飼養環境は子牛母牛のエサ・繋養方法、放牧の有無、パドックの有無、床と飲水の状態等、疾病状況は発生状況・病床期間・死廃事故状況について調査した。

【調査・比較結果】

脂肪交雑について育成技術評価値の高い農場では子牛の加療歴は少なく、病床期間が短い。母牛は BCS の分布が 3 ~ 4 に多く、平均年齢に差はないが若い年齢に偏った構成であった。飼養環境では母牛は放牧又はパドックを有する農場が多く、子牛は子牛房を有し、母牛・子牛ともに水槽は衛生的に管理され、母子牛ともに皮膚病は少ない状況であった。

枝肉重量については育成技術評価値の高い農場では自然哺乳で離乳は 4 ~ 4.5 ヶ月齢が最も多く、子牛の下痢症による加療歴は少ない。母牛では BCS の分布が 4 付近に集中する傾向にあり、他は脂肪交雑の場合とほぼ同様の状況であった。

【まとめ】

今回の育成技術評価値を基に繁殖農場の飼養管理の調査・比較を行った結果、脂肪交雑と枝肉重量ともに母牛管理と子牛の観察が重要であると考えられるが農場間での飼養技術には大きな差ではないため、各農場の飼養状況に応じた指導はさほど困難ではないと考えられる。今後は繁殖農場の飼養管理指導に際し、育成技術評価値を活用することで効果的な子牛の品質向上に向けた取り組みを推進したいと考える。